

目 次

第1編 創業まで

第1章 名村源之助の大阪鉄工所時代	1
名村源之助の生い立ち	1
大阪鉄工所時代	1
第2章 創業までの経過	5
安治川時代(上野鉄工所)	5
難波島工場の設立	7

第2編 名村造船鉄工所時代 / 大正2年5月～昭和6年3月

第1章 時代的背景—業界の躍進と沈滞	11
第2章 名村造船鉄工所の設立と第1次世界大戦の影響	14
設立当時の状況	14
業界の好調と当社の躍進	15
経営基盤の確立	16
第3章 大戦後の不況期と不況対策	18
不況期における当社の経営	18
経営方針とその特長	22
第4章 個人経営の終結	25
村尾船渠施設の買収	25
請負業者の整理と株式会社への切り替え	28

第3編 株式会社 名村造船所時代〈その1〉 / 昭和6年4月～20年8月

第1章 戦争経済の進展とわが国の造船・海運業	31
戦争経済の進展と業界の動向	31
海運・造船業界の戦時体制	32
第2章 株式会社 名村造船所の発足	34
株式会社の発足	34
営業の開始	35
発足当初の状況	38
第3章 経営の合理化と作業能率の増進	41
社業の発展	41
経営の合理化と諸管理の充実	45
第4章 施設の拡充と経営基盤の確立	51
施設の拡充	51
経営基盤の確立	55
戦争の進展と当社の変貌	59
原価計算の実施	64
第5章 戦争の終結	64
戦争末期の状況	65
戦争の終結	65
第6章 名村汽船株式会社	67
名村汽船合資会社の設立	67
江口汽船(株)との合併、株式会社設立	67

第4編 株式会社 名村造船所時代〈その2〉 / 昭和20年9月～29年12月

第1章 第2次世界大戦後における造船業の復興過程と当社の歩み	71
敗戦による混乱から再建へ	71
「計画造船」の進展と朝鮮動乱	72
合理化と技術革新の進展	73
造船業復興への政策的助成	74
第2章 再建への基礎	75
終戦直後の状況	75
再建への努力	82
第3章 施設の復興整備と取引先の拡張	87
施設の整備	88
日本郵船(株)、大阪商船(株)との取引開始	92
第4章 「計画造船」と経営基盤の整備	93
「計画造船」の進展	93
経営基盤の整備	96

第5編 株式会社 名村造船所時代〈その3〉 / 昭和30年1月～40年12月

第1章 造船業の発展と近代化、国際的地位の確立……………	101
「造船ブーム」の現出と「輸出船」「自己資金船」の建造…	101
自動化の進展と超大型船の建造……………	102
陸上工事部門への進出……………	102
海運業の集約と造船業界の再編成……………	103
第2章 「自己資金船」の建造と社業の躍進……………	105
「三笠丸」の建造……………	106
「三春丸」「めるぼるん丸」の建造 ……	110
「長良丸」の建造……………	112
陸上部門への進出……………	113
「りばふうる丸」の建造……………	114
その他の新造船……………	116
経営の合理化と技術の進展……………	118
第3章 「高速船」「外国船」の建造・修理と業界地位の確立 ……	128
「昭龍丸」「和龍丸」の建造 ……	128
施設の拡充・近代化「Mid-Body」「Fore-Body」の建造…	130
「りおでじゃねいろ丸」「伊豫丸」の建造 ……	131
施設の拡充と社内機構の整備……………	140
修繕船部門の拡充と実績の伸長……………	149
鉄構工事の発展……………	151
名村汽船㈱と小谷汽船㈱の合併……………	154

第6編 当社の現況と展望 / 昭和41年1月～

第1章 国際市場への進出と経営近代化の進展	157
「外国船」受注の盛行	157
諸施設・社内機構の近代化	159
第2章 当社55年の歩みと今後の課題	164
当社の特色・伝統・社是	164
今後の展望と課題	165

資料編	173
-----------	-----

年表	205
----------	-----

編集後記

当社55年史は、昭和34年2月、大阪市立大学教授狭間源三氏を介して同大学経済研究所教授酒井安隆氏に執筆を依頼することとなった。

編さん体制としては、まず酒井教授を中心に担当者2人で、主として明治、大正、昭和初期に在籍していた方々の家を訪問し、会長の生いたち、創業当時の状況、大正から昭和初期に至る経緯を中心に口述による資料を蒐集した。

これは、戦前とくに株式会社創立（昭和6年4月）以前の記録が全くなく、口述に頼るしか方法がなかったからであり、古き時代の記述をまとめるのみで約1年を要した。

その後、各部より社史編さん担当者を選出して、社史編さん委員会を結成し各部において責任をもって、昭和6年以降、現在に至る資料を提出せしめることとした。

その結果、濃淡はあったが、かなりの資料が提出された。しかし何分終戦当時大部分の資料を焼失したので、戦後に片寄ることもやむを得なかった。

そこで取りあえず、戦後（昭和20年8月以降）から酒井教授の執筆が始まり、当初は週に1回来社され、執筆されていたが、資料の不足、再蒐集その他の関係で、執筆がおくれたり、突如酒井教授が病魔におそわれる事態も併せて、一時中断せざるを得なくなった。

その後、38年に至り、酒井教授の病氣回復もあり、編さん業務を再開したのであるが、すでに発足以来4年を経過しており、50周年を過ぎている関係から、また最近の業績の発展なども併せて、当初の目標であった50年史を55年史に改めることに決定した。

そこで社史編さんのスピードアップをはかるため、社史編さん委員会を再編成し平野専務を委員長として再発足した。

これによって、本格的軌道に乗り、数十回の委員会をくり返し、昭和41年6月31日をもって酒井教授の脱稿となった。

その間、編別に脱稿したものについて、編さん委員会が、検討修正を加え前述の6月31日には文章上はすべて完成した。

その後、写真の蒐集に入ったが予想以上に多数の写真を手に入れることが出来、社史全体をより楽しい充実したものとなった。

最後に、当社55年史を振り返ってみて、会長の一代の偉大なる業績によって、また、同氏夫人きさ殿のかくれた貢献によって、今日の名村造船所が現出したことを、この小史で理解できるものと確信し、また若い世代の人々に、この小史が将来の人生航路に役立つことを願うものである。

昭和42年4月

社史編さん委員会